

バシエの音響彫刻の可能性を探る—その4—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学音楽学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 加津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000321

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



報告

バシエの音響彫刻の可能性を探る ―その 4―

《サバティカル研修報告》

岡田 加津子

A Research on the Potential of the BASCHET Sound Sculpture - Part 4 -

OKADA, Kazuko

[目次]

1. バシエの音響彫刻の分類
2. バシエの教育音具「バレット・ソノール」
3. 音響彫刻の製作現場
4. バシエ工房滞在で生まれた交流
5. クリスタル・バシエの奏法と作品
6. 今後の活動へ向けて

― はじめに ―

平成 30 年度の本学サバティカル研修の資格を得て、2018 年 10 月半ばから 2 ヶ月間、私はフランスにあるベルナル・バシエの工房に滞在した。その工房は、2017 年 5 月に初めて訪問し、大きな衝撃を受けた場所だ。その時、「私は必ずまたここに戻ってくる。」と固く決意し、それが 1 年半後に実現できたことは、何より幸運であったという他ない。

ベルナル・バシエの工房は、パリから南へ近郊電車で 30 分ほど行ったところにあるサン・ミシェル・シュル・オルジュ Saint-Michel-sur-Orge という町にある。1960 年代後半に、ベルナルが農場を買い取って、家畜舎を工房に改築し、同じ敷地内にある家屋は、そのまま家族の住居として使われた。建物は石造りで頑丈にできており、工房に改築された元家畜舎は特に天井が高くて、音響彫刻には持ってこいの構造である。

フランス・バシエ協会 L'association Structures Sonores Baschet は、この工房を本拠地として活動しており、私が工房に滞在することを許可し、バシエとバシエの音響彫刻に関するあらゆる知識を授け、常に私の滞在生活を支えてくれたのが、このフランス・バシエ協会の人々である。

本稿は、今回の 2 ヶ月間の滞在の主な目的であった、バシエの音響彫刻の分類と、教育音具

Palette Sonores についての研究、そしてバシエの音響彫刻を介して深まった人々との交流について報告するものである。

1. バシエの音響彫刻の分類

バシエの音響彫刻は一つ一つ個性が強いため、最初はそれぞれがバラバラに見えた。しかし、工房に遺されている作品に触れたり、アルバムに整理されている 1950 年代からの作品群を目で追っていくうちに、バシエ兄弟が好んで使う部材や気に入ったデザインなどに共通項や接点があり、またそれらが主題となり変化や発展をしていることがわかってきた。

1) 材質面から

- ① 金属丸棒系 ・ The Polytonal Percussion 多調性打楽器

(写真1)



写真1 金属丸棒系

- ② 金属平棒系 ・ The Rotating Whistler 回転式口笛打楽器

(写真2)

- ・ The Crosses 十字型打楽器



写真2 金属平棒系

- ③ 金属平板系 ・ (名称無し) 5つのスタンドベル (写真3)



写真3 金属平板系

- ④ ガラス棒系 ・ The Cristal Baschet クリスタル・バシエ

(写真4)

- ・ The Trombone Cristal トロンボーン・クリスタル



写真4 ガラス棒系

⑤ 弦系 ・ The Strings 弦打楽器 (写真5)

・ The Voice Leaf 声の葉



写真5 弦系

⑥ 混合系 ・ SAD (Salon des Artistes Decorateurs) …①+②

(写真6)

他にも、金属スプリングや、アルミの針金を束ねたもの(通称:ヒゲ)も好んで用いられる。

以上の分類方法によると、これまでに日本で復元された6基の音響彫刻も、各々どこかに当てはまることがわかる。



写真6 混合系



写真7 池田フォーン
(万博パビリオン)
金属平板系



写真8 川上フォーン
(万博パビリオン)
金属丸棒系+スプリング
+ヒゲ



写真9 高木フォーン
Photo / Yuki Moriya
(万博パビリオン)
ガラス棒系



写真10 渡辺フォーン
(京都芸大)
金属丸棒系

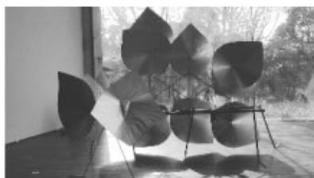


写真12 勝原フォーン
(東京藝大) 弦系



写真11 桂フォーン(京都芸大)
金属平板系+金属丸棒系+
弦系

2) 目的に応じて

① 芸術作品として ・ SAD (Salon des Artistes Decorateurs) 装飾
芸術展覧会 展示用 (写真13)

・ 各種インテリア



写真13 SAD

・1970年大阪万博において作られた17基の音響彫刻

- ② 環境デザインとして
- ・鐘楼
 - ・公演の噴水
 - ・学校のチャイム (写真14)



写真14 学校のチャイム

- ③ 演奏用楽器として
- ・The Cristal Baschet クリスタル・バシェ (写真15)
 - ・The Rotating Whistler 回転式口笛打楽器
 - ・The Polytonal Percussion 多調性打楽器
 - ・The Voice Leaf 声の葉



写真15 クリスタル・バシェ

- ④ 教育用音具として
- ・Palette Sonores パレット・ソノール 14種 (写真16)



写真16 パレット・ソノール



写真17

- ⑤ 音楽療法の道具として
- ・パレット・ソノールの活用 (写真17)

2. 教育音具パレット・ソノール Palette Sonores

1982年にSSB(フランス・バシェ協会)が発足したのは、このバシェ教育音具パレット・ソノール(直訳すると、「色とりどりの響き」)の著作権保護・管理・拡張・製作のためであった。今回のバシェ工房滞在期間中、パレット・ソノール全14種の構造を調査し、奏法についても研究した。また当地でのワークショップなどを通して得られた、パレット・ソノールの活用方法を紹介する。

1) 各々の名称と特徴

- ① The Three Crosses (3つの十字) (写真18 手前)

金属平棒系。十字に組まれた平棒を打つと、真下に設置されたカーボン製のコーンにより拡声される。平棒は各々ピッチが異なる。



写真18

② The Double Spring (2つのバネ) (写真18 奥)

左右に2つのバネがあるほか、6本の長さの異なるまっすぐな金属棒、1つの平棒の混合型で、1台でいろいろな音を組み合わせられる。

③ The Strings (弦) (写真19)

台形の金属枠に、8本の金属弦が張られている。弦の長さにより音のピッチが異なるが、正確な音階にはなっていない。

④ The Cristal (クリスタル) (写真20)

6本のガラス棒を、水で濡らした指の腹で柔らかく擦ると、透明な音が得られる。振動を伝える金属の縦棒の長さによって、音のピッチが異なる。

⑤ The Whistler (口笛) (写真21)

13本の金属の平棒が、2本のロープによって縦向きに宙吊りになっている。平棒の長さにより音のピッチが異なる。固いバチでグリッサンドすると、独特の高い残響が得られる。

⑥ The Arc (弓) (写真22)

長さの違う金属弦が3本張っており、ネジでピッチを調節できる。ブラジルの民族楽器ビリンバウをモデルにしたものと思われる。主軸となっている縦棒をたわませることによって音に揺らし効果を加えることができる。

⑦ The Stairs (階段) (写真23)

7本の金属平棒が少しずつずれて重ねられ螺旋階段のようになっている。音のピッチも少しずつ異なる。

⑧ The Grill (グリル) (写真24)

26本のまっすぐな金属棒を、斜めに横切るように金属の平棒を渡し、焼き網のように等間隔に束ねてある。音のピッチは微分音調で、金属棒の端から平棒までの長さに比例して、短くなるほど徐々に高くなるが、ある地点から逆転する。

⑨ The Spring (バネ) (写真25)

主軸となるバネの部分、コーンの重さによって曲がり、コーンはどの向きにも振れる。バネの部分の打ったり擦ったりした残響が、コーンの振れによって変化する。

⑩ The Star (星) (写真25)

3本の金属平棒が、様々な長さで重ねられている。音のピッチがそれぞれ異なり、多くの倍音を含んでいる。

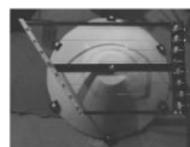


写真19



写真20

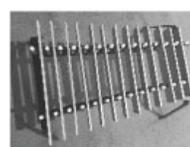


写真21



写真22

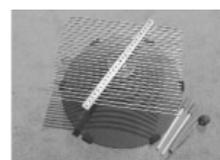


写真23



写真24



写真25

⑪ The Curved Rods (曲がり棒) (写真 26)

中央のまっすぐな金属棒には、バシェ特有のナットとボルトが組み込まれており、これにより複数の倍音が聞こえる。それを取り囲むように設置された2本の曲がり棒は、棒が長い分、低音が鳴る。

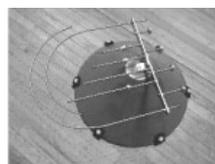


写真 26

⑫ The Straight Rods (まっすぐな棒)

8本のまっすぐな金属棒に、直角に金属の平棒を渡し、等間隔に束ねてある。金属棒の端から平棒までの長さによって、音のピッチが変わる。

⑬ The Disk (円盤)

金属の円盤の、真ん中からやや外れた所に穴が空けられ、下のコーンに取り付けられている。それゆえに支点から距離の長い箇所は盤上に圧力をかけやすく、その歪みによって音に変化を与えることができる。

⑭ The Candlestick (ろうそく立て)

1メートルぐらいのズングリ棒が、燭台のように縦に6本並ぶ。音のピッチは定まっていないうが、1本1本少しずつ異なる。

これらの音具を鳴らすには、素手、バチ、菜箸など、いろいろと考えられるが、バシェ自身が考案したバシェ・マレットもある(写真 23)。

以上のような観察・調査をしてみてもわかったことは、ベルナル・バシェが教育音具パレット・ソノールを考案する際に、素材を非常に吟味していたこと、そして展示用音響彫刻や大型楽器の持つ、「音が鳴る構造」を、ほとんど変えずに用いていたことだ。それが、パレット・ソノールの響きの深さに直接つながっているのである。

子どもたちが自分で音を出し、その音を身体で感じ、音と対話することが何より大事だと考えていたバシェの方針は、今、フランス・バシェ協会の人たちによって、丁寧に継承されている。

2) 子どものためのサウンド・ワークショップ

バシェ工房に来て1週間目、パレット・ソノールを用いた子どものためのサウンド・ワークショップを見学するために、サンス Sens という町を訪れた。この町にある「音楽・ダンス・舞台センター」には、バシェのパレット・ソノール一式がそろっており、近所の学校の子どもたちが先生に連れられて、ぞろぞろ歩いてやってきた。ワークショップの指導者はフランス・バシェ協会の会長ピエール・キュフィニ Pierre Cuffini 氏。彼はベルナル・バシェのアシスタントを永年務め、若い時から子どもたちにバシェの音の面白さを伝えてきたベテランの伝道師である。(写真 27)

ワークショップは2回あり、まず1クラス目は5～7歳ぐらいの25人。建物の外で、教室へは静かにそーっと入ってくるように指示されていた子どもたちは、好奇心にそそられながら

も、一生懸命、無言を貫こうとがんばっている。ピエールさんが魔法使いのように忍び寄り、床に丸く置かれたパレット・ソノールの音を一つ一つ鳴らしながら、ゆっくり移動していく。子どもたちがその後を追う。だんだん、子どもたちも我慢できなくなって、あちこちでパレット・ソノールを叩いたり引っ張ったりして、音を出している。最初は素手だ。どんどん音は重なり賑やかになって、子どもたちは興奮して走り回ったり、パレット・ソノールのコーンの下に潜り込んだりして、音を聴いている。



写真 27

子どもたちを充分遊ばせた後、一つのパレット・ソノールにつき1~2人を座らせ、ピエールさんが輪から出たり入ったりして、音の有無・強弱などを全員で表現させる。音群と戯れるだけなのだが、子どもたちは目をきらきら輝かせている。自分で音をコントロールするのが嬉しいのだろう。45分はあっという間に過ぎた。

2クラス目は8~10歳ぐらいの子どもたち20人。1クラス目に比べると、ずいぶん分別があるように見える。パレット・ソノールにすぐ夢中になる子もいれば、関心を示さない子もいる。しかし、ピエールさんがクリスタルを擦って音を出すと、みんな顔つきが変わった。クリスタルの元に皆が集まり、順番に触らせてもらうのをおとなしく待っている。それから好きなパレット・ソノールを探しに行く。しばらく音探しをしてから、一度沈黙タイム。どんな音を見つけたか、一人一人が短いフレーズを発表していく。一人の演奏が終わると、拍手の代わりに、他の子は肩のあたりで両手を振る。これならパレット・ソノールの繊細な響きとバランスが良く、耳が音を聴こうとする。

ピエールさんは、沈黙を大事にする。そして、子どもたちの自由な音探しの時間と、他人の音を聴く時間を、うまくコントロールする。指導者にとって、重要なポイントだ。子どもたちの年齢層、普段の生活環境、1回きりのワークショップか何回も続く授業か…様々な条件が重なり合って、音との出会いの場が作られる。

3) 大人のためのダンス・ワークショップ

滞在ひと月目に、今度は大人を対象にしたダンス・ワークショップが工房で行われた。これは二人の若いダンサーが中心になって企画したもので、集まった参加者は13人。ダンス経験のある人もない人も混じっていて、学校の教師や、ベビークラスでバシエに興味を持った若いお母さんもいる。(写真 28)



写真 28

まず、14種類のパレット・ソノールの間を、参加

者は静かに移動しながら、音探しをする。最初は素手で。しばらくしてから、打つためのスティックが配られる。

次は、参加者それぞれが小さなカードに動詞や形容詞を書き、そのカードを読む4人と、パレット・ソノールを演奏する人4～5人、踊る人4～5人に分かれる。カードに書かれた言葉（たとえば「擦る」「凍える」「開かれた」など）が読み上げられると、その言葉に反応して音が鳴らされ、またそれを身体の動きで表現する。グループはローテーションして変わっていく。

3つ目の活動は、パレット・ソノールの演奏者のうちの誰かがキャプテンとなり、即興アンサンブルの曲想や抑揚、テンポなどを誘導する。それを聴きながら、ダンサー側は身体で反応する。

このような身体表現ワークショップは、以前、ダルクローズのリトミックでも経験したことがあるが、ダルクローズ教育は根幹にピアノという存在があった。パレット・ソノールはピッチが不規則なので、それよりもさらに自由度が高い。平日夜9時前から始まったワークショップは2時間後に終了となったが、参加者は終了後もいつまでも興奮気味にしゃべっていて、なかなか帰ろうとしない。パレット・ソノールは子どものクラスもよいが、大人のクラスも大変興味深く、大きな可能性を感じた。

3. 音響彫刻の製作現場

① The Voice Leaf の製作

工房では毎週月曜日と火曜日の午後、フレデリック・フラデ Frédéric Fradet 氏（フランス・バシエ協会理事長）とアラン・デゥモン Alain Dumon 氏（ベルナール・バシエの元アシスタント）の二人が、協力し合って The Voice Leaf を作っていた。（写真29）この The Voice Leaf はバシエの考案した音響彫刻の中でも、かなり楽器に近い作品で、歌手の声を拡声するだけでなく、巨大な葉っぱ型のコーンの裏には、3～4本の隠れ弦が仕込まれている。それら



写真 29

は弦の張り方に細工が施してあり、インドの弦楽器シタールのような響きができる。フランス・バシエ協会は、この The Voice Leaf の製作著作権を持っているので、いくつも同じものを作ることができる（もちろん手作りなので、まったく同じというわけにはいかないし、部分的に改良したり、新しい部材を試したりしているようだ）。しかし、The Voice Leaf に適した厚みと弾力と柔軟性を備えた大型アルミ板を探すだけでも一苦勞。やっと見つけたアルミ板をカットし、研磨剤で表面を磨き、折り目を付けるまでで2ヶ月経過した。少しの妥協もしないその製作ぶりに心から脱帽。

②パレット・ソノールの製作

工房では、The Three Crosses や The Arc のコーンをカーボン紙で作る作業を見ることができた。この作業は前述のフレデリックさんが一人で手作業で行なっている。カーボン紙に型をとり、カットして (写真 30)、浅い円錐形を形作り、ビスで留める (写真 31)。晴れた日にスプレー缶で着色し (写真 32)、天井に吊るして乾かす。



写真 30



写真 31



写真 32



写真 33

また別の日にはエミール君という若い助手が来て、パレット・ソノール

のコーンに、黒いゴムを6ヶ所取り付け作業を手伝っていた。(写真 33)

このゴムがあるおかげで、コーンが床から浮いて、よい響きが得られるのだ。

11月末には、イヴリー・シュル・セーヌ Ivry sur Seine という町にある FRED LAFFONT 製作所を見学した。(写真 34) その所の所長のフレッド・ラフォン氏とアシスタントのアモリ君が、パレット・ソノールの金属部分の製作をすべて請け負っていることを、私は初めて知った。金属加工専門の作業所であることは一目見てわかったが、所長のフレッドさんは実は有名なエクステリア・デザイナーで、これまでも水に浮かべる音響彫刻を作るなど、その緻密な作業テクニックと音への感性を兼ね備えた、ハイセンスなアーティストであった。またアシスタントのアモリ君は、パリの大学で金属デザインを学んだ才能ある若手アーティスト。この人たちの手によってパレット・ソノールの金属部材が一つ一つ丁寧に作られている、ということに、私は大きな感動を覚えた。(写真 35)



写真 34



写真 35

4. バシェ工房滞在で生まれた交流

1) フランス・バシェ協会 L'association STRUCTURES SONORES BASCHET

2018年春から協会は新体制となり、ピエール・キュフィニ会長(前述)、クレア・コロ

Claire Collot 副会長、フレデリック・フラデ理事（前述）の3名が執行部となった。他に事務アルバイトの女性や、会計士や弁護士も加え、また他の協会員も含めて、よくミーティングが行われていた。私個人としては、ピエールさんからはおもしろい奏法や歴史的な話を、クレアさんからは（彼女の家にホームステイしていたので）フランスでの生活のあれこれを、そしてフレデリックさんからは音響彫刻の構造と製作工程について、多くの教えと惜しみない援助を授かった。これまで音響彫刻という物体に心を奪われていた私は、その陰にはそれを生み出したバシェ兄弟を敬愛し、その芸術遺産を保護しようと日々尽力している多くの人々がいることに気がついた。

2) バシェ文化センター Centre Culturel Baschet (略してCCB) (写真 36)

ベルナール・バシェが晩年、その設立に大変尽力して完成したので、記念にその名を冠した、市内唯一の文化センターである。建物の中は客席250～300人の音楽ホールと、子どもたちがレッスンに通ってくる音楽教室とに分けられる。音楽ホールでは月に1～3回ぐらい芝居や



写真 36

ダンス、演奏の舞台公演があり、それ以外にも市の式典や市民の祭典に使用されていた。私もこのホールで行われたヒップホップダンスと音響彫刻のコラボレーション公演にゲスト出演した。

音楽教室エリアには、パレット・ソノール一式が常備しており、それらを使った子どものためのサウンド・ワークショップを見学したり、ソルフェージュの授業を見学させていただいたりした。

3) 工房への来客、地元の人たちとの交流

工房へはしばしば客人があった。私が着いた翌日には、サン・ミシェル・シュル・オルジュの市長さんと、市の文化関連の人たち、そしてベルナール・バシェの遺族も参加しての歓迎レセプションが行われ、バシェとサン・ミシェル・シュル・オルジュ市との絆の強さを印象深く感じた。その後も、子ども連れの家族や学生、映画音楽のプロデューサー、ロックミュージシャン、音響工学の専門家、作曲家、音楽教室の教師などが来房して、音響彫刻の試演、録音、レンタルなどが行なわれていた。



写真 37

中でも、フランチェスコ Francesco さん（イタリア人）、シャイマール Shyamal さん（インド人）など、

即興演奏の達人とのセッションは大変楽しく、よい経験になった。(写真 37)

5. クリスタル・バシェの奏法と作品

クリスタル・バシェ *Cristal Baschet* は、バシェの音響彫刻の中でも、最も楽器に近い、いや、すでに楽器と言いついてしまってもよいかもしれない、オリジナル作品である。1952年、バシェ兄弟によって考案されてから、ジャン・コクトーの映画「*Testament of Orpheus*」(1960年)に使われたり、黒澤明監督の「どですかでん」(1970年)の中で、作曲家武満徹が用いたりした。その後も改良を重ね、1970年代後半にはほぼ現在の形に定まった。

これまでクリスタル・バシェを使ったことのあるアーティストは、世界で40～50人いるようだが(フランス・バシェ協会のホームページによる)、クリスタル・バシェの専門家として現在も活動しているのは、10人に満たないであろう。今回はその数少ない中から、パリに住む2人の専門家を訪問し、レッスンとレクチャーを受けた。

1) ミシェル・ドゥヌーヴ Michel Deneuve

ミシェルさんと最初に会ったのは2017年5月、在外研修でパリへ来た時だ。その時も2回レッスンを受けたが、自分は一つの音を鳴らすのに精一杯であるのに対して、ミシェルさんの両手が自由自在にガラス棒の上を飛び回るのを目を見張ったものだった。(写真 38)

それから1年半後の今回、バシェの工房から近郊電車と地下鉄を乗り継いで、パリのミシェルさんの自宅へ4度レッスンに通った。工房には常時2～3台のクリスタル・バシェが置いてあったので、レッスンで教わったことを、工房へ帰ってすぐおさらいできることが嬉しくてならなかった。日本へ帰るとクリスタル・バシェに触れなくなる、という焦りが、一層、私を練習に追い立てた。

今回、ミシェルさんの演奏や指導法から、彼のクリスタル・バシェに対する音楽観が見えてきた気がする。彼は映画音楽の作曲なども手掛けており、一般に広く受け入れられる音楽を目指している。したがって、クリスタル・バシェで名曲クラシック音楽を弾いてみせたり、声楽曲の伴奏をしたりもする。奏法についても、テヌート・スタッカートやアルペジオの多用など、ピアノスティックな感覚が伝わってくる。また、残響をコントロールするためにフット・ペダルを付けることをベルナル・バシェに勧めたのも、ミシェルさんであったという。しかも、より持ち運びしやすいように、彼は楽器本体を半分ずつに切り分けたクリスタルも所持しており、3枚のコーンを入れるケースと、本体を置くスタンド1ケース、計4つの手荷物にして、世界中を飛び回って演奏している。その創意工夫と情熱は並大抵のものではない。

現在、ミシェルさんはフランス・バシェ協会には属さず、単独で活動している。クリスタル・



写真 38

バシエの製作権はフランス・バシエ協会にあり、新しいものを勝手に作ることはできない。「だからクリスタル・バシエがなかなか世間に広まらないのだ。」とミシェルさんは言う。「いろいろなメーカーが、こぞってクリスタル・バシエを作るようになれば、もっと演奏者もオリジナル曲も増えるだろう。」と。いつか日本にも、クリスタル・バシエの上陸する日が来るだろうか…。

2) キャトリーヌ・ブリセ Catherine Brisset

前述のミシェル・ドゥヌーヴ氏の第一の弟子で、パリ在住。今回のフランス滞在で、私はキャトリーヌ・ブリセの存在を初めて知った。ちょうど折よく、フィラルモニー・ド・パリ Philharmonie de Paris で開かれたグラス楽器のワークショップで、彼女に会うことができた。クリスタル・バシエについて話を伺いたいと申し出ると、後日2度も自宅に私を招き入れ、クリスタル・バシエの奏法や作品について、熱心に説明してく



写真 39

れた。自宅には、キャトリーヌさん自身がベルナル・バシエの元で1992年に製作したという約3オクターヴのクリスタル・バシエがあり、完璧に調律されていた。もともとフルートとダンスをしていたというキャトリーヌさんは、身体の使い方がしなやかで、動き自体が音楽的だ。(写真 39)

彼女の活動は、作曲家に新作を依頼して楽譜を読み込んで演奏する場合や、即興的なセッションを含む室内楽を演奏するなど、演奏スタイルは決まっていないが、どちらかというアカデミックで現代音楽寄りだといえる。

印象的だったのは、「クリスタルは、弦楽器だと思って曲を書けばよい。」という彼女の言葉だ。「ヴァイオリンの曲は、クリスタルでたいてい弾ける。」と言って、バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタを、さりと弾いてみせた。また、彼女は一例として武満徹作曲『揺れる鏡の夜明け』を挙げた。これはヴァイオリン2台のための作品で、なるほど、ヴァイオリンのたおやかなフレーズやハーモニクスの透明な響きなど、まさしくクリスタル・バシエのために書かれたような音楽であることを、改めて再確認した。

クリスタル・バシエはガラス棒が鍵盤状に平均律で並んでいる外観からは鍵盤楽器、ガラス棒を指で擦るといふ奏法からは弦楽器、そしてコーンから出る音は管楽器のような特徴を合わせ持っている、不思議で複雑な楽器だ。したがって、それを使う奏者や作曲者の音楽観によって、全然違うアプローチがなされるのも当然かもしれない。

私は、バシエの工房に滞在している間、ほぼ毎日のようにクリスタル・バシエに触っていたが、演奏しているときの感覚としては、笙に近かった。一つの音を持続しながらそれがハーモ

ニーを作っていく様は、笙の響きのグラデーションに似ていて、ガラス棒の上を指の腹が寄せでは返す感覚が、笙の呼吸法を思わせた。私は、楽譜を見て何か曲を演奏するというよりも、ガラス棒の上に置いた指の感覚と、それを聴き取る耳の感覚だけで音楽を紡いでいくことを好んで繰り返した。その際、ほとんど視覚は必要なかった。今後の音楽表現の一つとして、触覚と聴覚で音楽を作っていくことに目覚めた、貴重な体験であった。

6. 今後の活動に向けて

1) バシェの教育音具パレット・ソノール Palette Sonores を用いた音楽教育の実践

フランス・バシェ協会からパレット・ソノール 14 種を数回に分けて購入し、京都子どもの音楽教室の鑑賞クラスやリトミッククラスの中で、随時導入していく。また本学における授業や、大学コンソーシアム関連の小中学校教員研修クラスなどにおいても活用する。なお、パレット・ソノールの購入については、2019 年度京都市立芸術大学特別研究助成に採択された「バシェの教育音具“Palette Sonores”を用いた音楽教育」の助成金の中から、今年度は 4 台購入した。

2) 芸術資源研究センター・バシェの音響彫刻プロジェクト（略称：芸資研バシェ・プロジェクト）の開始

これまで日本で修復・復元された音響彫刻のメンテナンスとアーカイブの体系化、またそれらを使った新しい芸術創造をめざす。2020 年は 1970 年大阪万博から 50 周年のメモリアルイヤーでもあるので、11 月ギャラリーアクアにて「バシェの音響彫刻 特別企画展」の開催を予定している。ここでは、本学および東京藝大で修復・復元されたバシェの音響彫刻のアーカイブを展示公開し、音響彫刻 3 基、パレット・ソノール 10 台（予定）の展示、そしてそれらを用いた公演、ワークショップ、シンポジウムを企画中である。

3) フランス、バルセロナ、日本のバシェ研究協同体制

フランスはバシェ兄弟の母国であり、兄のベルナル・バシェの作品はフランスに多く遺されている。だが、弟のフランソワ・バシェは晩年バルセロナに移住したので、フランソワの作品のほとんどは、バルセロナ大学にある。パリにはベルナルの遺族がいて、バルセロナにはフランソワの遺族がいる。遺族同士はあまり親交がない。1970 年大阪万博のために来日して、17 基の大型音響彫刻を製作したのは、弟のフランソワ・バシェであり、兄のベルナルは来なかった…。そうした経緯から、これまでフランスとバルセロナと日本は、三者で協働することはなかった。

2013 年、2015 年、2017 年にバルセロナから、フランソワ・バシェの最後の弟子マルティールイツ氏が来日し、計 5 基の音響彫刻の修復・復元に携わったことで、まず日本とバルセ

ロナの間に信頼関係が築かれた。そして、このたび私がサン・ミシェル・シュル・オルジュのバシエ工房に2ヶ月滞在したことで、日本側とフランス・バシエ協会の人々やバシエ遺族との親交が一層深まった。これからはフランス、バルセロナ、日本の3つのバシエ・グループが協同して、バシエの音響彫刻を守り、新しい芸術創造へつなげていこう、そのためにはお互いにさらに交流を深めていこう、という提案が、フランス・バシエ協会からなされた。

— おわりに —

2016年度から「バシエの音響彫刻の可能性を探る」活動を始めて、今年度で4年目になる。最初の3年間、私個人でチャレンジできることは、だいたい実施できたのではないかと考えている。今年度からは芸資研に軸足を置き、芸術的遺産の保護という観点を重要視すると同時に、さらに広い視野と深い洞察を備えた、新しい創造活動を行なっていきたい。また音楽教育、芸術教育の分野で、既成概念にとらわれない自由でしなやかな提案をしていきたい。

バシエ工房滞在の日々を振り返り、たくさんの人々にお世話になったことを今あらためて思い起こすが、特にフランス在住の日本人、宮崎千恵子さんと千葉恵子さんには、言語の面でも精神的な面でも、大事な時にはいつも助けていただき、大きな支えとなった。この場を借りて、もう一度感謝の意を伝えさせていただきたい。

最後になりましたが、2018年度サバティカル研修を許可してくださった審査委員長の鷺田清一本学元学長に、心より御礼申し上げます。

(京都市立芸術大学教授 岡田加津子 専門／作曲)